

大事なものは見えにくい

東條 加寿子

『大事なものは見えにくい』（2012年、角川ソフィア文庫）等の筆者で哲学者の鷺田清一さんは、4月から朝日新聞の新コラム「折々のことば」を担当しています。新聞一面の左中ほどにあるこの小さなコラムで鷺田さんは、古来から現代にいたる時空から様々な言葉を拾い、それに対しての自らの思索を綴っています。毎朝の一粒の叡智は、その日の思考を目覚めさせてくれます。

鷺田さんの文章をよく読むようになったのは、息子が高校受験勉強をしていた頃です。高校入試問題小論文に鷺田さんの著書の一節が抜粋されていたことをきっかけに、鷺田さんの『大事なものは見えにくい』や『「聴くこと」の力』（2015年、ちくま文芸文庫）を読み、息子は600字の小論文を書く練習をしました。今思えば、中学生にとっては難解な臨床哲学の話でしたが、そのやわらかい文体と言葉の奥にある優しさが救いだったと思います。『大事なもの・・・』は大学受験をむかえた今も傍らに置いてあります。

さて、4月20日の折々のことばで鷺田さんは、思想家の内田樹の言葉を紹介しています。

「わからないもの」を受け容れ、自分の中に未聞の言明や心性をむりやりねじ込んでいく。

・・・

わからないけれどこれは大事というものを掴むこと。「わかる」の意味はそこにある。「なんだかまるで分らないけど、凄そうなもの」と「知っていることは整合的なんだけれど、うさんくさいもの」を直観的に識別できるようになれば、それだけで大学で学んだ意味はある。

（2015年4月20日、朝日新聞朝刊「折々のことば」）

大事なものを（たとえ未だ実態がよくわからなくても）掴むことが、「わかる」ということ。なにが大事でなにが大事でないのかを掴むこと、しかも「直観的」に識別できるようになること。それが大学で学ぶということであると言っています。

この日のコラムが目にとまったのには伏線があます。3月半ば、筆者の所属する大学の卒業式で読まれた聖書の一節とまさに同じことを言っていると思ったのです。

わたくしはこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよまし加わり、それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、・・・

(口語訳聖書 ピリピ人への手紙 第1章9～10節)

これら二つの言葉から、私たちは何を読み取ることができるでしょうか。

およそ現代社会は情報に満ち溢れ、ともすれば膨大な情報の山に埋もれてしまいます。この知識基盤社会で生き抜くためには、一人ひとりが問題解決能力を持っていることが必要であり、学校教育においても、問題解決能力の育成は喫緊の課題であると言われています。二つの言葉はその前提として、大事なこととそうでないことを見極める力が重要であることを説いており、さらに、そのためには理性だけではなく、「直観」や「するどい感覚」、すなわち「感性」が必要であるといっているのではないのでしょうか。

「折々のことば」で鷺田さんに拾い上げられる言葉そのものが、現代を生き抜くための、見えにくいけれども大事な「感性」なのだと感じています。

(とうじょう・かずこ 教授/教員養成センター)
